

第3回JOURNAL (7月24日)

7月12日、Bankfield Museumで、Lesley, Jeanetteとともに through the surfaceプロジェクトについて話す機会をもちました。30人以上の人々が集まって下さり、和やかな雰囲気の中、制作の経過などを報告しました。また、その日は私の誕生日でもあったので、お祝いもしていただき、楽しい時を過ごしました。私がこのプロジェクトに応募するため、川嶋啓子さんに資料を手渡したのが去年の7月11日、1年と1日前であったことを思い出し、このプロジェクトにメンバーとして参加させていただいている幸せを改めて強く感じる一日でした。

7月18日、The Japan Foundationで、Jeanetteとワークショップを開催しました。初めての機会で、大変緊張しましたが、皆さん楽しんで下さったようです。私にとってもよい経験となりました。

7月は湖水地方へのJeanetteとの旅行、そしてこれら大きなイベントの準備などもあり多忙な毎日でしたが、制作の方も徐々に見えてきた感があります。イギリスに来た当初は新しい作品のためのアイデアの全くない状態でした。しかし、各地を転々とする5月を経て、6月、7月 Huddersfieldに定住し落ち着いてゆくうちに、こちらでの生活が私にもたらしたものが次第に浮かび上がってきたように思います。それは、Jeanetteとのnomadic lifeによって短い時間のなかに濃縮された、様々な場所、様々な人々との出会いと別れの経験でした。次々に手にしては、失なわれてゆくたくさんの場所とたくさんの人々の記憶。そして、そのような中でも、失わずにこれからも保持していきたいと願う手中の記憶。これらの記憶を、訪れた各地のチャリティーショップで購入した古着を使ってあらわそうとしています。当時は無意識的でしたが、いま思うと、その土地に暮らす人々の生活の象徴として古着を集めはじめたのではないかと思います。わたしの中にあるその土地、そこに暮らす人々についての記憶がほどけ形を失っていくように、私が訪れた土地で出会った古着をほどき、そして、ほどけた記憶を失ってしまわないように紡いで糸玉、長い物語に再生しています。

しかし、制作の途中、古着を素材として使うことに不安を感じ、素材の変更を考えた時がありました。知らない人の古着を使って制作することが、私をcomfortableとuncomfortable、familiarとunfamiliarな気持ちの間で揺り動かしたのです。はじめの頃はチャリティーショップで買って来た古着やリネンが、私にとってとても親しみのあるもののように感じられていたのですが、次第になにか不確かなもの、私はこの人をよくは知らないというもうひとつの感覚が気になりはじめたのです。「もし、私がよく知っている人の古着をつかえば、もっと快適なのに・・・」と。そこで、これは適当な素材ではないかもしれないと考え、Jeanetteに相談しました。すると彼女の返答は「その不確かさは、あなた自身のdisplacementの経験を反映したものかもしれない」とのことでした。

確かに、彼女が示唆したように私の古着に対する感覚は、イギリスに滞在する私の感覚とよく似ています。訪れた先の人々の暮らしは、その町を知っているので想像できるけれども、よくは知らない。馴染みがあって、馴染みがない。

また、日本は西洋化されているけれど、日本文化は西洋文化そのものではない。イギリスの文化は馴染みがあるけど、馴染みがない。ということで、古着に対して抱く感覚の理由が分かった私は、これらはここでの私の制作のためにふさわしい素材であると納得し、制作を進めています。

そういえば、こちらに来るまでは、ウールを使って制作するのかな・・・と、思っていたのですが、こちらに来てJeanetteのウールを使う理由を聞き、私はウールを使わないと決めたのです。というのも、イギリスで生まれ育った彼女にとって、ウールは風景のなかにいる動物、羊のものであり、土地の記憶だということ、そしてそれを使って風景を描いているのだという彼女の説明に、大変納得したからです。

私にとって、ウールはそれほど明確な意味を持つ素材ではありません。なので、私にとって意味のある素材を見つけたい、使いたいと思っていたのでした。

吉本 直子